



まなび通信

令和4年度 主体性をはぐくみ、つなぐ研修会

令和4年12月19日(月)に中丹地域の園の5歳児担任、小学校1年生担任、中丹地域保幼小連携推進委員の皆様にお集まりいただき、本研修会を行いました。「幼小接続はどうして大事な?」「毎年連携活動しているからなんとなくやっているけど…」そんな思いや疑問について、國學院大学 准教授 吉永安里(よしなが あさと)様の御講演や研究協議を通して、参加者が学び合いました。「幼児教育って遊んでいるだけに見えるけれど…」実は、この幼児期の遊びには育ちと学びがたくさん詰まっています。その子どものよさを見取る手掛かりとなるのが「**幼児期の終わりまでに育ってほしい姿**」です。子どもに関わる全ての大人が自分事として幼児期の教育について理解し、子どもの育ちと学びを小学校教育へとつないでいくために、自分に出来ること・しなければならないことは何でしょうか。



学びの芽生えから、 自覚的な学びへ



吉永安里様の御講演からの学びをお伝えします。自分事として考えてみていただければありがたいです。

今一度、教育活動において、子どもたちの主体性や自発的な態度が大切にされているか見直してみましよう。

國學院大学
准教授
吉永 安里様

国の動向としての「架け橋期のカリキュラム」

この言葉を聞かれたことはありますか?現在、中央教育審議会初等中等教育分科会のもとに「幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会」が設けられ、国の幼児教育の質の向上や幼保小接続について議論がなされています。この中で、5歳児と小学校1年生の2年間を生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期と捉え、一人一人の多様性や0~18歳の学びの連続性に配慮しつつ、教育の内容や方法を工夫することが重要とされています。

この架け橋期のカリキュラムの作成においては、幼児教育に近づけるとか幼児教育で行っていることを小学校の活動に取り入れていくとかいう表面的なスタートカリキュラムの在り方から、もっと子どもたちの主体性や発想を生かすよう深化したカリキュラムを考えていく必要があります。スタートカリキュラムだけでなく、さらに長期的に1年生全体の学びの在り方や指導の在り方について考え、**組織的にカリキュラムを編成・実施することが必要です。**

幼児期の指導の在り方も
小学校の指導の在り方も

核になるのは、
**主体的・対話的で
深い学び**



「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は、子どもが育つ方向性を示すもの。
子どもの活動をこの10の姿で見取ることで、子どものよさが見えてきます!

幼児期の終わりまでに、どんな姿が育ってほしいですか。また、小学校ではその姿をどう伸ばしますか。

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)は、大人が指導するものではありません。環境をどのように工夫すれば子どもたちが主体的に自己を発揮できるのかを考えていくことが大切です。幼児期の教育はまさにこの環境設定が大切になされています。小学校教育のよさももちろんあります。子どもの育ちや学ぶべきことに合わせて、学習の方法を変えていくことで、より子どもの主体性が発揮されます。

参加者の振り返りより

◎ 幼児期の学びはとても貴重なもので、今後の小・中・高校から社会に出ても必要不可欠なものであることを改めて感じ、自分の職業の大切さを実感しました。

架け橋期と聞くと、年長時期と1年生の2年間だけのことを頭に浮かべてしまいがちですが、そこをつなぐためには、5歳以前のカリキュラムの見直しも行う必要があるということを知り、子どもの成長は絶え間なく、連続性があるものだとこのことを改めて感じる事ができました。(園の先生)

◎ 幼稚園や保育園の先生は、本当に上手に場の設定や声かけをされます。幼稚園や保育園の様子を定期的に見に行ったり、先生方に話を聞いたりして、お互いの園や校種のことを知り、連携していけたらと思いました。

児童が安心して学校生活をスタートし、主体的に自己を発揮できるよう組織的に支援することが大切だと思いました。(小学校の先生)

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」

- 健康な心と体
- 自立心
- 協同性
- 道徳性・規範意識の芽生え
- 社会生活との関わり
- 思考力の芽生え
- 自然との関わり・生命尊重
- 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- 言葉による伝え合い
- 豊かな感性と表現



十八歳の姿に
つながっている

ぜひとも園内研修・校内研修で京都府幼児教育センターホームページの研修セット・研修動画を御活用ください。
10の姿をどう捉えたらよいか、みんなで共有しましょう。